様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　　元 年　　５ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６ＫＫ００３５

研究課題名（和文）アンジェラ・カーターの作品に見られる日本の影響とジェンダー・パフォーマティビティ（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Japanese Influence and Gender Performativity in the Writing of Angela Carter (Fostering Joint International Research)

研究代表者
生駒　夏美（Ikoma, Natsumi）

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：６０３６５５２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,500,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：アンジェラ・カーターの作品における日本の影響、特に日本の文楽や歌舞伎などの芸能や谷崎らの文学作品が与えた影響について、大英図書館やイーストアングリア大学図書館のアーカイヴでの調査結果と合わせて検討した。成果はイギリス、ベルギーなどで口頭発表した他、BBCが製作したドキュメンタリーでも取り上げられた。共同研究者のスティーブン・ペンソン教授とは大英図書館での講義を共同開催した。また2018年6月には、「アンジェラ・カーターと日本」と題して国際シンポジウムをイーストアングリア大学で開催した。これはカーター研究者たちの大きな注目を集め、成果論文は著名な学術誌の特集号となることが決定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究はアンジェラ・カーターという英国人作家の作品における日本の影響を検討するものである。カーター研究は国際的に盛んだが、カーターの日本滞在については最近まであまり知られておらず、日本の影響を検討する学術書も極めて少なかった。本研究はカーターの文学には実は日本の影響が大きいことを明らかにし、日本の芸能や文学の痕跡を辿った。カーター研究の穴を埋める大きな意義を持つものであると共に、英文学における日本研究者の発信としても重要な意義を持つものである。

研究成果の概要（英文）：I conducted research on the influence of Japan on the writing of Angela Carter, with a special focus on Japanese theatre tradition such as Bunraku and Kabuki, and Japanese Literature such as Tanizaki and Kawabata. The research involved archive research in the British Library as well as Library Archives at the University of East Anglia. I was invited to give an aural presentation in the UK, as well as in Belgium, and was featured in the documentary program of BBC. With co-researcher, Dr Stephen Benson, I taught at the British Library Adult Education course, and organized an international symposium on Angela Carter and Japan, which attracted international attention among Carter scholars. The outcome of this symposium is going to be published as a special issue of an established academic journal, Contemporary Women's Writing from Oxford University Press.

研究分野：英文学、フェミニズム、比較文学

キーワード：英文学　Angela Carter　ジェンダー　フェミニズム　比較文学　文楽　歌舞伎　国際会議

様　式　Ｆ－１９－２

１．　研究開始当初の背景

研究対象である英国人作家アンジェラ・カーターは、近年ますます評価が高まっている小説家、翻訳家、劇作家、ジャーナリストである。翻って日本では、訳書はあるものの、研究書は現代女性作家研究会編集の『アンジェラ・カーター　ファンタジーの森』(勁草書房 1992)と、応募者執筆による『欲望する文学　踊る狂女で読み解く日英ジェンダー批評』(英宝社 2007)などと比較的少数にとどまっており、また中後期の作品や、小説以外の作品の研究はあまり進んでいない現状にある。カーターは 60 年代末から 70 年代初頭に日本に在住し、日本から強い影響を受けているにもかかわらず、この点は日本はおろか世界でもあまり知られていなかった。主任研究者はアンジェラ・カーターの作品を研究し続けてきたが、近年は特にカーターの受けた日本の影響に焦点を当てた論文を執筆し、国際的な場での発信を続け、この領域の開拓に努めてきた。またカーターの同棲相手の手記を英語翻訳して出版し、世界のカーター研究者たちの注目を集めた。公式の自伝が 2017 年に出版されたこともあり、カーターの日本滞在の影響について国際的な興味が湧き起こりつつあった。

２．　研究の目的

国際的なカーター研究の場に日本の影響という視点を新たに寄与し、それを広めることを目的とした。特にカーターの作品（小説、脚本や編集、ジャーナリズムを含む）におけるジェンダー・パフォーマティビティの概念に注目し、それがいかに彼女の２年間におよぶ日本体験の影響を受けて構築されたものであるかを検討し、作品中における女性性や男性性の演劇性、特に規範的ジェンダーを過剰に演じるキャラクターの持つ、越境性や規範転覆性と日本文化との関係を明らかにしていくことを目指した。カーター研究のニッチな領域としてではなく、重要な中心的領域として、国際的に認識されるようになることを目指した。

３．　研究の方法

今回の国際共同研究は、カーター研究の主要拠点の一つであるイギリスのイースト・アングリア大学の協力を得て、カーター研究者スティーブン・ベンソン教授と共に行った。文献研究、論文執筆、シンポジウムやセミナーの開講、講演、書籍の編纂などがその活動内容である。文献研究は大英図書館とイースト・アングリア大学図書館のアーカイヴで行い、同大学でのセミナーを２回、大英図書館での講義を１回、アントワープ大学での講義を１回開催した。集大成として開催した 2018 年 6 月のシンポジウムはイースト・アングリア大学で開催され、世界中からカーター研究者が集まった。このシンポジウムの成果は Oxford 大学出版から学術誌 Contemporary Women’s Writing の特別号として出版が決定し、2020 年中の発行が予想される。

４．　研究成果

在英の研究者を中心とする世界のカーター研究者にとって、「カーターと日本」はまだあまり開拓されていない新しいトピックであった。近年、公式の伝記が発行されたこと、また主任研究者によるメモワールの翻訳が出版されたことなどによって、カーターの日本滞在の詳細について、ようやく知られるようになってきたこともあって、日本はカーター研究においてのホットトピックとなりつつあるなか、本国際共同研究は、このように湧き起こってきた知的興味に応えるものとなり、注目を集めた。日本からの知見を国際的に発表するというその目的を果たし、大きな貢献を果たすことができた。

(1) 作品における日本の影響について、特にパフォーマティビティに注目した共同研究を行った。大英図書館と大学図書館でのアーカイヴ調査からは、カーターが日本の歌舞伎や文楽、また文学作品や刺青などの事象に強い興味を持ち、イギリスへの帰国後も本の収集などを続けていたことがわかった。また日本語を解さなかったカーターにとって記号としての位置を保ち続けた日本語は、記号だからこそメタな視点をカーターにもたらしたことが分析から浮かび上がった。

(2) カーターの作品中の女性性や男性性の概念は、日本の歌舞伎や文楽、また谷崎などの文学の影響を大いに受けたものであることが分析から浮かび上がってきた。ジェンダーの虚構性についてはカーターは日本滞在以前から関心を示していたが、日本で歌舞伎や文楽などのジェンダーのパフォーマンスを目の当たりにし、さらに興味を強めた様子が明らかになった。また日常生活における女性や男性のパフォーマンスが、イギリスでカーターが親しんでいたそれとは大きく異なっていたことも興味を強める一因

となり、カーターのジェンダー観に大きな影響を与えたことがわかった。これらはカーターの後期の作品内容に大いに影響している。

特に歌舞伎や文楽は表面的な興味にとどまらず、その歴史的背景もカーターの興味を引きつけた可能性がある。異性装や売春とのつながりや、人形がもった意味、人形とセクシュアリティとの関係など、日本だけでなく西洋の文学の伝統も併せて考えると、カーターの世界観の形成過程が垣間見える。特に西洋における人形言説には、セクシュアリティが深く関係している。自分が作成した彫刻に恋したピグマリオンは、生身の女性への嫌悪からそのような思いを抱いたのであるし、現実の女性よりも機械人形を好む男性の物語は西洋に古くから存在する。そのような語りに対抗する形で、バーナード・ショーの『ピグマリオン』やイプセンの『人形の家』が書かれている。カーターの "The Loves of Lady Purple" はこれらの伝統と共に日本の文楽にインスピレーションを受けて書かれた作品で、人間に生まれ変わる人形を描いて、日本の文楽における女性性表象の批判となっている。一方でより広くは、ピグマリオン言説にあるような人形愛が、いかに現実の女性を否定するものであるかを炙り出している。

(3) 口頭発表の成果。2018 年 1 月には単独で UEA での研究発表を行った他、3 月には共同研究者であるスティーブン・ベンソンと共に大英図書館でカーターについての講義を受け持った。4 月にはアントワープ大学にて招待講演を行い、本研究について発表した。これらの国際的なカーター研究の場での発表によって、カーター研究における日本の重要性、またカーターの研究において異文化資料の研究の必要性を主張することができた。日本文学や日本伝統文芸など、英文学の研究者には馴染みのない領域であることがほとんどであるが、カーターと日本の関係が示すように現代においては文学は学問の領域性を超えて存在し、文化間の相互の影響が大きな役割を果たしている。口頭発表や論文などの成果は、その事実を伝えることにも役立ったと考える。

(4) 国際シンポジウムの成果。イーストアングリア大学で 2018 年 6 月 30 日に開催した国際シンポジウムにはアメリカ、スイス、日本、フランス、そしてイギリス国内からカーター研究者が集まり、世界的な注目の高さを示すものとなった。発表者たちは様々な角度からカーターと日本の関係を分析した。主任研究者はカーターのオリエンタリズムがどのように変化したかを扱った。他の発表者は、カーターの文学と日本の童話の関係、日本の俳句の影響、川端や芥川など日本の文学作品の影響、日本のコミックの影響などを扱った。このシンポジウムはカーター学会の立ち上げの場ともなり、日本というトピックがカーター国際学会の主要なテーマとなったことを意味した。また国際シンポジウムの成果は、オックスフォード大学出版から発行されている学術誌 Contemporary Women's Writing の特別号となることが決定した。主任研究員がそのアソシエート編集員となる。これらによってより一層、カーター文学における日本研究の重要性が国際的に確立すると期待できる。

(5) 本研究はカーター研究の本場であるイギリスを始め国際的に注目を集めた。主任研究者は BBC からの取材を受け、その様子はカーターについてのドキュメンタリーの中で放映された(2018 年 8 月)。これは主任研究者の側の働きかけによる企画ではないが、これまでの主任研究者の業績の結果、BBC への推薦があり実現した。これまでの研究が評価されての結果とみなせるだろう。このプログラムの放映は大きな反響を呼び、全英にカーターと日本の関係が知られることとなったのは大きな利点であった。

これらの研究成果は、当初目標とした以上のものを達成したと考えている。特に人形のトピックはカーター研究のみにとどまらず、世界の現代文学、また文化事象の分析に発展可能である。カーターに与えられた重要な視座を今後も生かして、日英あるいは各国の境界を超えた所にすでに位置している文学研究の担い手となっていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

Ikoma, Natsumi. "Through Madame Butterfly's Looking-Glass: Gender Transition in the Writings of Angela Carter after Japan," *Special Issue: Contemporary Women's Writing*, Oxford UP. Forthcoming.

〔学会発表〕（計 4 件）

Ikoma, Natsumi. Invited Lecture. “Literature and Gender in Japan”, MA Seminar in Gender Studies, University of East Anglia, 23 November, 2017.

Ikoma, Natsumi. Invited Lecture. “Angela Carter’s Marionette and Japanese Theatre Tradition”, Research Seminar, University of East Anglia (UK), 18 January, 2018.

Ikoma, Natsumi and Benson, Stephen. Invited Lecture. “Angela Carter: *The Bloody Chamber* and the Fairy Tale”, the British Library, Adult Education course for 20th Century Literature, 19 March, 2018.

Ikoma, Natsumi. "From Orientalist Detachment to Feminist Involvement: Angela Carter's Narrative Transition," Angela Carter and Japan Symposium, UEA, 30 June 2018.

〔図書〕（計 4 件）

Ikoma, Natsumi (ed. & trans) and Sozo Araki, *Seduced by Japan: Memoir of the Days spent with Angela Carter*. Eihosha, November 2017. 175 pages.

Ikoma, Natsumi. "Encounter with the Mirror of the Other: Angela Carter and Her Personal Connection with Japan." *Women Writing Across Cultures: Present, Past, Future*, Pelagia Goulimari ed., Routledge, 2018, pp.77-92.

Ikoma, Natsumi. “Monstrous Marionette: The Tale of a Japanese Doll by Angela Carter”. *Re-Orienting the Fairy Tale: Contemporary Fairy-Tale adaptations across Cultures*, Luciana Cardi and Mayako Murai, ed., Wayne State UP. Forthcoming.

Ikoma, Natsumi. “Carter and the Japanese Signs: Bunraku, Mishima, Irezumi and Sozo Araki”. *Pyrotechnics: The Incandescent Imagination of Angela Carter*, Charlotte Crofts and Marie Mulvey-Roberts, eds., Palgrave Macmillan. Forthcoming.

〔その他〕

国際シンポジウムのホームページ：Angela Carter and Japan
https://carterandjapan.wordpress.com

６．研究組織

研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕
研究協力者氏名：スティーヴン　ベンソン
ローマ字氏名：Stephen Benson
所属研究機関名：University of East Anglia
部局名：Department of Literature, Drama and Creative Writing
職名：Senior Lecturer

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。